

現代日本における動物倫理の議論 「供養」という連環的生死観に注目して

東京工業大学環境・社会理工学院
本学共同研究 研究協力者
小澤茉莉

要旨

近年ファッション業界において、生産時における環境破壊や衣服の大量廃棄などの社会問題が顕在化している。こうした問題を踏まえ、国内外で注目されているのが、より良い社会や環境を目指す「エシカル (ethical)」という価値観である。中でも、動物の待遇改善を目的とする動物福祉 (animal welfare) や、人間と動物との関係を哲学的に考察する動物倫理 (animal ethics) の議論が見られる。また、欧米では動物の殺生を伴う動物性素材への抵抗から毛皮の生産を禁止し、菜食主義者であるヴィーガンの人々は動物由来の食品や衣服を回避するなど、動物福祉や動物倫理を通して人間と動物の関係を再考する動きが顕在化している。

一方で、動物福祉や動物倫理を主導的に展開してきた西洋社会において、人間の視点を通して動物を階層序列化しているなど、キリスト教的人間中心主義を基盤とした動物観が指摘されている。すなわち、動物倫理の議論は、動物への倫理的配慮を通して脱人間中心主義を目指しながらも、これまで人間という主体を通して展開されてきたがゆえに人間中心主義的だという批判が存在するのである。

その中で注目すべきなのが、「供養」という動物の殺生に直面する人々の動物に対する弔いの精神である。実際に、動物を殺生し資源化する企業や団体は、動物の死に対する罪悪感や、動物の犠牲のうえで経済活動が成り立っていることへの感謝の気持ちから、その死を弔うべく慰霊碑や供養塔を建立し、供養精神を体現してきた。

そこで、本稿ではこうした供養の精神とその背景にある生死観に焦点を当て、これまでの動物倫理の議論自体が人間中心主義的思考の範疇にあることや、議論の主体が消費者中心であることを指摘するとともに、西洋社会の基盤にあるキリスト教と日本における仏教の動物観および生死観の比較を踏まえ、今後の動物倫理の展開を考察する。

キーワード

エシカル、動物福祉、動物倫理、供養、生死観

1 はじめに——「エシカル」という 価値観への注目

近年ファッション業界において、自然環境に対する社会問題が顕在化している。具体的には、衣服関連の産業を通して世界の排水の20%、二酸化炭素の10%が排出されており〔環境省 2020: 18〕、1日あたり1,300トンもの衣服が焼却・埋め立てされている〔環境省 2022〕。こうした問題から、国連貿易開

発会議 (UNCTAD) ではファッション業界は世界で第2位の汚染産業とみなされている〔国際連合広報センター 2019〕。

こうした大量生産システムに対して、近年国内外で注目されるのが「エシカル」という価値観である。エシカルとは、英語の“ethical”を指し、「倫理的な」という意味である。「エシカル」は環境問題から社会問題、人権問題に至るまで包括的に表現できる概念として注目されてきたが、エシカルの定義自体は統一

されておらず、使用する場面や状況に応じてさまざまな解釈がされている¹⁾ [万・池亀 2017: 25]。

この「エシカル」は、「エシカル消費（倫理的消費、ethical consumption）」や、ファッションの領域では「エシカルファッション（ethical fashion）」という言葉で用いられることが多い。まず、エシカル消費とは、より良い社会に向けて、地域の活性化や雇用などを含む人や社会・環境に配慮した消費行動である [消費者庁 2022b: 183]。消費者の身近なところで商品の生産・消費・廃棄の一連の流れが営まれていた時代と異なり、世界中のさまざまな商品・サービスを入手し、消費できるようになった今日では、消費者にたどり着くまでの生産過程や消費後の廃棄過程のつながりが消費者から見えにくくなっており、物のライフサイクルを通じた社会や環境に対する負担や影響を意識しないまま、大量に消費が行われている [消費者庁 2017: 3]。エシカル消費は、このライフサイクルのつながりを可視化することを試み、社会や環境に配慮し製造された商品やサービスを積極的に選択し、消費後の廃棄についても配慮する消費活動である [消費者庁 2017: 3-4]。すなわち、エシカル消費とは、生産から廃棄に至るまでの一連の過程や、そうした流れと消費行動の関係の可視化を表す概念なのである。

また、ファッション業界では「エシカルファッション」と呼ばれ、これは、環境や労働などに配慮したファッションを意味するが、こちらも明確な定義や基準は設けられていない。たとえば、消費者庁は、エシカルについて、環境面、労働条件、動物福祉、地産地消などの各課題が同列で意識される傾向にあると指摘している [消費者庁 2022a]。具体的には、動物由来素材の使用を極力減らしたり、農薬や工場排水などによる環境汚染や児童労働といった問題が発生しないようにするため、オーガニックコットンやリサイクル素材を使用したりするなど、複合的な要素を

持つ [消費者庁 2017: 4-5]。すなわち、エシカルファッションとは、ファッション業界の労働環境や自然環境といった衣服の生産背景に対する倫理的な尺度として用いられている概念なのである。

実際に、消費者の間でエシカルファッションを求める動きは加速している。2013年にバングラデシュの縫製工場が入居していたビル「ラナ・プラザ」の崩落事故²⁾をきっかけに、イギリスを中心に世界各国に展開している「Fashion Revolution」という団体では、経済成長や利益よりも、環境を保護・回復し、人々を大切にする世界的なファッション業界を目指し、啓発運動を行っている [Fashion Revolution Foundation 2022]。こうした啓発運動は SNS でも展開されており、生産背景の透明性を求めるハッシュタグ「#whomademyclothes（誰が私の服を作ったのか?）」は、インスタグラムにおいて2022年9月29日時点で94万件以上の投稿がされている。このように、今日では SNS という日常生活に身近なツールを通して、ファッション業界における生産背景の透明性を求める消費者の声が世界規模で高まっているのである。

エシカルファッションに関する動きが見られる中、近年注目されているのが、衣服の生産過程における動物福祉（animal welfare）や動物倫理（animal ethics）の議論である。たとえば、ファッション業界では動物の殺生を伴う動物性素材に対する抵抗が見られ、実際にイタリア政府は国内での毛皮生産を禁止し、同国に残るミンクの毛皮農場を2022年6月までに閉鎖させると発表しており [カレーラ 2022]、グッチやイヴ・サンローランなどのブランドを擁するケリングも全ブランドで動物の毛皮の使用を2022年秋までに禁止すると発表している [ドラン 2021] など、欧米社会を中心に毛皮の生産・使用を禁止する動きが加速している。

この背景には、毛皮の生産における動物の

扱いや殺生方法など倫理的な問題が存在する。たとえば、ミンクやキツネ、ウサギなど毛皮として使用される動物は、狭く不衛生なケージの中で飼育され、二酸化炭素による窒息殺や肛門から電気を流す感電殺など残酷な方法で殺生されており、その数は毎年1億頭を超える〔NPO 法人動物実験の廃止を求めるとの会 2021〕。こうした実態を受け、ファッション業界において動物福祉の議論が活発化しており、2019年にケリングは『動物福祉スタンダード』を公表し、サプライチェーン全体における動物の扱いに関する枠組みを提示した〔ケリング 2022〕。

このようにさまざまな社会問題を抱えるファッション業界において、生産背景に対する疑問視から、動物性素材の使用の可否が捉え直されている。すなわち、大量生産システムという人間による生産活動が世界規模で社会問題を引き起こす現代において、動物福祉や動物倫理を通して人間と動物との関係を再考する動きが顕在化しているのである。その一方で、こうした議論について、先述のように「エシカル」という価値観は消費者が製品やサービスを購入する際の倫理的尺度であり、最終的にその基準は消費者の視点を基盤としたものが多い。加えて、実際に殺生に関わる生産者の姿が見えてこず、生産者の殺生に言及する先行研究もほとんど存在しないため、動物福祉や動物倫理は限定的な議論であると言える。

その中で、筆者が注目するのは、「供養」という精神である。供養は日本において古来行われてきた、死者および殺生の対象となった生物に対する弔いの精神である。供養の主体は殺生を行う生産者が中心であり、実際に日本では、殺生に対する罪悪感や動物の犠牲によって事業が成り立っていることへの感謝の気持ちから、企業や研究機関などが動物実験や食品および衣類の原材料となる動物の殺生に対して供養碑や供養塔を建立する動きが見られる。すなわち、エシカルファッション

をはじめ動物倫理の議論が消費者を中心に活発化し、実際に大手ブランドも動物性素材の生産を禁止するなど具体的な行動を示す中で、動物を殺生する生産者たちの間では動物の死に向き合う精神的営為が続いてきたのである。

そこで、本稿では動物倫理に焦点を絞り、これまでの議論を整理するとともに、それらの議論の根底にある人間中心主義的思考に対する批判点を記述する。さらに、これまで消費者側の視点で展開されてきた動物倫理の議論と並行して、動物の死に直面しながら殺生を乗り越えようとする生産者たちの供養の精神に注目し、両者の立場から今日の生命の大量生産・大量消費に対する問題提起を試みる。

2 これまでの動物倫理の議論

まず、動物倫理の議論に入る前に、人間と動物の関係において重要な論点である動物福祉について整理する。これは1950年代に提唱された「3つのR」や1960年代から1970年代にかけて形成された「5つの自由」などを中心とした動物の待遇改善の運動であり、動物実験を行う研究者や畜産関係者などによって進められてきた〔伊勢田 2016: 7〕。具体的には、前者の「3Rの原則」とは、国際的に普及・定着している実験動物の飼養保管や動物実験の適正化の原則のことであり、動物の苦痛の軽減（Refinement）、使用数の減少（Reduction）、代替法の活用（Replacement）の3つの原則を指す〔環境省 2008〕。また、後者の「5つの自由」という原則は、1960年代にイギリスで生まれ、空腹・渇きからの自由、不快からの自由、苦痛・損傷・疾病からの自由、正常行動発現の自由、恐怖および苦悩からの自由を指し、実際に畜産におけるEU指令や各国の法令の土台となっている〔枝廣 2018: 39〕。実際にこうした動物福祉が社会的に認知されたのは、1964年にイギリスの自然保護活動家ルー

ス・ハリソンが著書『アニマル・マシーン』で、近代畜産における密飼いなどの家畜飼育方法の虐待性や薬剤投与による畜産物汚染を厳しく批判したことがきっかけとされている [石川 2010: 1]。

こうした動物福祉と並行しながら議論されているのが、動物解放論 (animal liberation) である。動物解放論は、人間と動物の関係はどうあるべきかを論じる動物倫理学 (animal ethics) における主要な立場の1つであり、動物の権利運動の理論的根拠となる哲学的考察である [伊勢田 2016: 7]。そして、これらの議論に大きな影響を与えてきたのが、哲学・倫理学者ピーター・シンガーの主張である。シンガーの著書『動物の解放 (Animal Liberation)』は、“liberation (解放)” という言葉が指すように、人間の動物に対する専制政治に対する批判から、動物の「解放運動 (liberation movement)」に言及している。具体的には、シンガーは本書の中で、解放運動は私たちの道徳的視野の拡大を要求するものであり、人間以外の種 (species) に対するこれまでの偏見や恣意的な差別や態度についての考えを変えることを本書の目的としていると述べている [シンガー 2011: 15-16]。

また、シンガーは動物の解放について、これまでの黒人や同性愛者、少数民族などの解放運動と呼応させながら議論を展開している。そうした差別問題を踏まえ、「種差別 (speciesism)」という人類にとっては有利であるが他種にとっては不利な偏見または偏った態度が持つ問題点を指摘している [シンガー 2011: 27]。こうしたシンガーの主張を通して、人間という「加害者」と人間以外の動物という「被害者」の対立的な立場を設定し、動物を人間の抑圧から解放させるというシンガーの意図が明確に現れている。すなわち、動物の権利運動 (animal rights movement) は、「人間」から「動物」へと権利の主体が拡張していくと同時に、動物の

解放の議論についても、これまでの人間社会における差別問題および解放運動の歴史を基盤とする形で展開されてきたのである。

このような議論を踏まえながら、シンガーは「工場畜産 (factory farming)」について、家畜である動物がいかにか過酷な状況で育てられ屠殺されるかを紹介するとともに、現代の畜産のあり方を強く批判している。最終的に、シンガーは菜食主義 (vegetarianism) に注目し、ベジタリアンになることは、動物に苦しみを与え殺生することを止められる実践的かつ効果的な手段であると主張し、ビジネスとして多くの資金を投じ集約畜産を行う企業に対するボイコットとしての菜食主義の側面についても言及している [シンガー 2011: 203-204]。すなわち、種差別下に置かれる動物たちの解放を目指して動物性の食物を回避するという行為は、工業型畜産システムに対する抵抗運動として作用してきたのである。

こうしたシンガーの議論を踏まえながら、近年では動物倫理の論理を生活習慣の中で体現しようとする「ヴィーガニズム」という価値観が注目されている。1944年に設立されたヴィーガン関連の団体である The Vegan Society によると、ヴィーガニズムとは、食物、衣類、その他の目的での動物に対するあらゆる形態の搾取や残虐行為を可能な限り排除しようとする哲学や生き方を意味する [The Vegan Society 2022]。実際に、2014年からイギリスを拠点に実施されているキャンペーンでは、1月に植物由来の食品を食べるように呼びかけ、2020年には100万人の参加者に達成する³⁾など、欧米諸国を中心に動物性の食材を避けて菜食を選択する人々の存在が注目されている。このように、動物倫理に関する議論は観念的範疇を超え、消費者の生活実践上でヴィーガニズムという市民運動として実体化しているのである。

3 人間と動物をめぐる〈排除〉と 〈包摂〉の両義性

一方で、こうした人間と動物をめぐる議論について、新たな対立構造も生じている。たとえば、ヴィーガニズムは動物の脱搾取を求める点や、畜産業や漁業がもたらす環境負荷を軽減できる点において倫理的な性質を持つと言えるものの、動物の犠牲を前提とした生活と対立していると同時に、そうした生活を修正することは困難であると考えられているため、ヴィーガンではない人々から反発を招くことが多い〔古瀬 2022: 17〕など、ヴィーガニズム自体に対する批判も見られる。

さらに、こうした工業型畜産における動物と人間の関係をめぐる議論は人間中心であるという批判もある。たとえば、これまで人間の権利は抑圧された大衆による専制者への抵抗の中で成立してきたが、動物の権利に関しては、動物からの要求を承認するのではなく、人間側が動物側に対して恩恵を施すという、人間が動物より上位に位置するという思想を前提としている点が指摘されている〔小松他 1997: 171-172〕。

この人間中心主義 (anthropocentrism) は、動物と人間の関係の議論における主要な論点の1つである。これまで欧米では、動物愛護運動や環境倫理意識の高まりにより、アリストテレスやデカルト、ベーコンなどの人間中心主義の西洋哲学やストア派のような聖書創世記に関する解釈によって、キリスト教的人間中心主義に依拠した動物観の見直しが行われた〔依田 2007: 174〕。さらに、中村生雄によると、人間中心主義的思想は20世紀後半以降にその正当性に対して疑問視されるようになり、人間と自然界の生物との共存が目指されるべきであるという環境論的・自然中心主義的な認識が主流となっていった〔中村 2010: 30〕。また、人間中心主義が人間と自然界の優劣関係を人間間の優劣関係へと拡大解釈させ、西洋世界の覇権や白人至上主義

の論理的な温床になったことに対しても批判が向けられた。ことに、先述のピーター・シンガーが『動物の解放』の中でこれまで人類が冒してきた動物への「専制政治」を厳しく糾弾したことは、西洋社会における人間中心主義を決定的に転換させる契機となったと中村は指摘する〔中村 2010: 31〕。

こうした人間中心主義の議論は、動物倫理に関する議論にも影響を与えている。黒田昭信は、肉食主義に注目し、肉食批判の根拠としてあるのが動物の権利であり、ひいては個体として生命を与えられたものがその生をまっとうする権利である「生命権」であると述べる〔黒田 2022: 128〕。この生命権には、痛みを感じるか否かという「感覚の有無」と、完全に同一な遺伝子情報を持った個体が再生可能か否かという「再生可能性」という個体概念に関する2つの規定があり、動物たちが人間と同じように「苦しみ」を感じるかを科学的かつ哲学的に論証することは難しい一方で、植物には痛覚が無く、再生可能であるため、植物を食べることは植物の権利侵害には当たらないというのが菜食主義者たちの主張であるとしている。また、動物倫理や動物の権利の理論自体が人間主体の概念の延長で展開されており、人間中心主義から動物中心主義へ移行しても、人間を中心とした思想を基盤としていることに変わりはないと批判している〔黒田 2022: 128-129〕。

このような動物倫理や動物の権利における人間中心的思考の背景には、キリスト教の思想を前提とした動物観が存在すると指摘されている。たとえば、長野浩典は池上俊一が記した「西洋世界の動物観」(『歴博フォーラム 動物と人間の文化誌』、吉川弘文館、1997年)を次のように整理した。具体的には、聖書の「創世記」にある、神が人を造り、魚や鳥、家畜、獣など地を這うものすべてを支配させるという内容の文言は、「動物は悪霊にとり憑かれた悪しきもの」であり、「神の聖なる

力（人間）によって征服されるべきものである」という考えを表しており、動物を暴力的／従順な、善き／悪しき、賢明／愚か、悪魔的／聖なる動物とに峻別する。また、動物を野獣と家畜に峻別し、空間的にも区別するなど、動物を細かく分類し階層序列化していることから、西洋人の動物観は人間中心主義や、動物を細分して善悪をつける特徴があると指摘する〔長野 2015: 210-211〕。

以上の議論から、動物倫理における人間と動物間での<排除>と<包摂>の両義性が指摘できる。具体的には、人間が動物を階層序列化させ権利を付与しながら人間社会へと<包摂>していると同時に、実際にはヴィーガニズムをはじめとした消費者の生活実践を通して動物の殺生を回避することで人間社会から動物自体を<排除>するという構造が見て取れる。すなわち、動物倫理における人間と動物との関係において、「人間」のまなざしを介して人間と動物との関係を決定づけているという人間中心主義の思想が存在する。このように、近年の動物倫理における議論は、人間中心主義から脱するための思想が目指されながらも、その実態として人間中心主義的思考の範疇にあるという矛盾を抱えているのである。

その一方で、この人間中心主義における「人間」という対象自体も限定的である。冒頭で述べた「エシカル」やこれまでの議論を踏まえると、動物倫理における行為の主体は「消費者」が中心である。すなわち、動物を殺生した後の資源としての動物を享受する消費者の視点を通して動物倫理の真偽が問われており、そこには動物を育て殺生する「生産者」の視点が介在していない。実際に、伊勢田哲治は、これまで倫理学自体が、自分自身の思考や感情と切り離し、論理的にどのように結論を導き出すかを考える学問であり続けており、実践という観点が不足していると述べ、動物倫理の議論は人間と動物の関係の中で実際に行われてきた営みから遊離していると指

摘している〔伊勢田・井上 2022: 13〕。

すなわち、「生産」と「消費」の場が分けられることによって、動物の育生と殺生の場も分断され、私たち人間は動物の生命の循環に触れる機会が少なくなっていると指摘できる。動物がどのように生き死ぬのか、そして動物たちの生命と私たちの生活とのつながりが不明瞭であるがゆえ、消費者である私たちは冒頭に述べたような「エシカル」をはじめとした生産背景における倫理性を希求するのではないだろうか。そして、現在の動物倫理の思想および実践として、人々は動物性素材の使用をやめることで動物の殺生を避けようとするが、これはあくまでも消費者の視点を起点としたアプローチであり、そこには生産者のまなざしが介在していない。こうした生産者と消費者のつながりが欠如している状況だからこそ、今後動物倫理の議論を包括的に発展させていくためには、生産者の殺生という行為そのものに注目し、議論の主体として生産者の存在に注目する必要があると筆者は考える。

ここで、動物倫理の議論において生産者に注目する際の手がかりとなるのが、動物の殺生を通して立ち現れる「供養」という精神である。実際に、動物福祉や動物倫理の議論が活発化しにくい日本において独自の理論を展開するためには、供養に注目する必要があるという指摘も見られる。伊勢田は、日本における動物福祉に関する取り組みについて、つねに欧米からの外圧に答える形で受動的に展開されており、その理由の1つとして、日本文化における動物福祉の取り組みの背景にある思想の異質性を指摘する。同時に、日本文化の文脈においても納得できる動物福祉の理論を構築するための手がかりとして、「動物供養」や「動物慰霊」に注目している〔伊勢田 2016: 6〕。そこで、次章では供養精神に焦点を当て、供養とは何か、そしてどのような歴史のもとでその精神が強化されてきたのかを整理する。

4 「供養」という連環的生死観

まず、供養の対象となる「動物」について、先述のキリスト教世界における分類と日本のそれとでは大きく異なっている。日本では、人間、哺乳類、昆虫、魚類などのすべての生物を「生類」とする動物観を持っている〔長野 2015: 211〕。先述したように、キリスト教は動物と植物を明確に分け、動物を階層序列化するなど線引きを行ってきたが、日本ではそうした境界は曖昧である。たとえば、供養文化において、日本では草木を供養する「草木供養」の慣習が存在する。具体的には、山形県米沢市では、「草木塔」や「草木供養塔」と刻まれた石碑が見られるが、それらの建立の背景には、草木にもそれぞれ靈魂が宿っており、その草木から得られる恩恵に感謝し、伐り倒した草木の魂を供養する精神があると指摘されている〔米沢市企画調整部秘書広報課 2022〕。すなわち、日本における生命観は、自然や植物など心を持たないものも成仏できるという「山川草木悉皆成仏」の語にも示されるように、仏教の思想を基盤としている。同時に、動物のみならず植物も魂を持つと考えられていることから、動物や植物を峻別および階層序列化するキリスト教を基盤とした思想とは異なる生命観である。

そうした動物観および生命観を持つ日本では、古来「生類」に対する供養が行われてきた。長野によると、「供養」とはサンスクリット語のプージャナー (pūjanā) の訳であり、仏や菩薩、諸天などに香華や燈明、飲食物などの供物を捧げることを意味する。日本の民間信仰では、死者や先祖に対して死者の冥福を祈って法会などの善事を行う追善供養を指すことが多いが、仏教自体と関係なく、死者への対応を供養と呼び、針供養など無生物に対する供養精神も見られる〔長野 2015: 214〕。

こうした供養精神の背景には、生き物を殺

生することに対する罪悪感があるという指摘がある。たとえば、江戸時代に出版された『つちくれかゝみ』(1706(宝永3)年成立、『新編信濃史料叢書四』所収)では、日干ししていた蚕の繭から千万人もの悲鳴を聞いた男が、それらは虫が干し殺される声だと気づき、僧侶に供養を願い千手観音を勧請したという内容が記されており、養蚕農家の虫を殺すことに対する罪悪感が表れている〔長野 2015: 126〕。このような人間が感じる生物の殺生に対する罪悪感は、仏教の世界では「殺生罪業観」と呼ばれる。殺生を避けることは仏教の重要な戒めであり、不殺生戒と称され、出家者だけでなく在家信徒の守るべき五戒の第一に挙げられ、八正道の1つでもある〔依田 2018: 223〕。そうした殺生罪業感を乗り越えるための「装置」の1つが生類供養であったが、同時に供養の背景には、生類の祟りを恐れ、それを鎮める意味合いもあった〔長野 2015: 216〕。また、輪廻転生という仏教的観念との結びつきから、生類を殺生することは人間の生まれ変わりを殺生することになるため、供養は人間を含めた生類全般に対して行われる行為でもあった〔長野 2015: 217〕。

実際に、供養精神は狩猟や稲作農業、漁業や養蚕業など生類の生命を奪うことで成り立っている生業と密接に関わっており、産業の近代化に伴って、より一層供養の精神が強化されてきたという指摘もある〔長野 2015: 223-224〕。具体的には、依田賢太郎によると、明治維新の欧米化政策による殖産興業の振興により動物が資源化され、各種用途別の業種に分けられた結果、慰霊や供養の対象となる動物の種と量が拡大するとともに、慰霊や供養を行う主体が、従来の講中や社中、村落有志などから業界などの団体へと質的転換が起こった。たとえば、食肉用動物の場合、畜産業者や食肉加工業者、食肉販売業者、調理師会、獣医師会などが主体となって慰霊や供養を行った〔依田 2018: 36-37〕。また、

動物慰霊碑や供養碑の建立の背景には、畜産や食肉、実験や愛玩など動物の資源化や商品化が急速に進展したことによる動物を殺すことへの心の痛みやうしろめたさが存在し、そういった精神の処理が動物の慰霊や供養と結びついていった〔依田 2018: 15〕。その後、昭和時代以降になると、研究開発の活性化に伴い、実験動物慰霊碑が大学や製薬企業などに多数建立されるようになる。たとえば、魚の養殖や家畜の育種など動物の生命操作が盛んとなったことで、研究や生産過程で死滅する動物を慰霊するために碑が建立された〔依田 2018: 38-39〕。

筆者の研究領域である蚕糸業についても、以上のような供養精神が見られる。たとえば、1897（明治 30）年に建立された蚕影碑（群馬県高崎市）は、降雹により蚕の餌である桑の葉に大きな被害が生じ、蚕を飼育できない状況となったため、止むを得ず蚕を埋葬した後、蚕影山大神を祀り蚕の霊を慰めた〔依田 2018: 98-99〕。また、長野県岡谷市では 1934（昭和 9）年に製糸業関係者によって蚕霊供養塔が建立され、犠牲になった蚕の霊を慰め、蚕糸業の発展を祈願した〔依田 2018: 99〕など、生物の殺生を実際に行う生産者が主体となって供養精神が体现化されてきた。

このような供養文化の変遷とともに、生を絶たれる多数の動物の命への関心を示す碑文が次第に増加していることから、殺生罪業観の呪縛から解放されるとともに、生命への洞察が深化し、犠牲になった命や生前の貢献への感謝の気持ちが強まったと依田は考察する〔依田 2018: 39〕。現在においても、日本の企業が原材料となる動物に対して供養の祭事を執り行う⁴⁾など、供養精神は継承されている。すなわち、供養という文化は、科学技術の発展によって可能となった生物の大量生産という仕組みが生産者の主体的な供養の営為を強化してきたという歴史を内包しているのである。

日本では供養精神を表す取り組みがされてきた一方で、欧米社会では人間のために犠牲になった軍用、消防用、救助用などの動物の記念碑は、史実を周知し省察させることを目的に多数建立されているが、動物の霊や魂を対象として建立されていない〔依田 2014: 59〕。この背景には、絶対神を信仰する欧米社会において、人間のために動物を殺すことは神によって許されているというキリスト教精神が存在する〔依田 2007: 175〕。また、欧米において唯一神以外のものを拜むことは偶像礼拝として厳しく禁止されており、キリスト教会の伝統では動物の霊は認められていない〔依田 2014: 59〕。

また、供養精神はキリスト教世界および仏教世界における生死観とも密接に結びついている。西洋人の生死観に多くの影響を与えたキリスト教の観点から捉えると、人間は造物主である神によって創造された永世の被造物であったが、神に逆らって犯した罪のために、死なざるを得ない存在になったことから、キリスト教における死は神が与えた刑罰とみなされると同時に、霊魂と肉体の分離に過ぎず、復活・永世するものであるという生死観が形成されている〔鄭 2011: 76〕。また、キリスト教的な死とは、生の最後ではなく新たな生の始まりであり、再臨と審判を通して永世の死後の世界（天国）へ向かうために死を準備し、受容しようとする観念を形成してきたと考えられている〔鄭 2011: 76-77〕。

その一方で、日本における生死観の 1 つである仏教は、悟りを開いた仏陀による自らを解脱するための教えであり、神への帰依を目的としないため、来世観を有するとは言い難いと鄭は指摘する。また、死によって生が終わるのではなく、輪廻を通して生と死は 1 つにつながるという「生死一如」の観念が存在する〔鄭 2011: 77-78〕。すなわち、供養の前提にある生死に対する捉え方について、前者のキリスト教においては、霊魂／肉体、生の世界／死の世界という二元的な生死観が

見られ、後者の仏教においては、生と死を明確に分けず連環するものとして捉える死生観が見られるのである。

上記のキリスト教と仏教の死生観を踏まえると、より巨視的な視点で殺生および供養精神を捉えることができる。仏教思想を基盤とする供養において、生と死は閉じた世界の中にあるのではなく、両者は互いにつながり合っている。すなわち、供養という死を見つめる精神的営為は、その死の背景を省察するとともに、死を超えた先にある次なる生をまなざしていると言えるのではないだろうか。

5 結び——動物倫理における「論理」と「実践」の融合を目指して

以上のように、近年の動物倫理の議論は工業型畜産における家畜汚染などの社会問題や動物の大量殺生に対する非倫理性を契機に、欧米を中心に活発化してきた。こうした議論の背景には、工業型畜産を通して人間が意図的かつ大量に動物の生命を殺生するという人間中心主義に対する批判があった。畜産の問題を認知した消費者たちは、ヴィーガンとして動物性の食材や素材を回避する動きを見せ、シンガーが主張した「動物の解放」が目指された。しかし、実社会は動物の犠牲のうえで成り立っている側面が強いため、動物性のものをすべて回避することは困難であるという批判的な意見も見られる。また、「人間」のまなざしを通して、同じ「生命」を持つ植物と動物の間に線を引き、動物を階層序列化する思考自体が人間中心主義の域を出ていないという批判もある。すなわち、人間中心主義からの脱却を目指して議論されてきた動物倫理は、人間という主体を通して展開されてきたゆえに人間中心主義的であるという矛盾の渦中にあるのである。

その中で注目すべきなのが、供養精神を通して生命観の問い直しである。供養という営為は、動物の殺生に直面する生産者の弔いの

精神である。実際に、動物を殺生し資源化しながら経済活動を行う企業や団体は、主体的にその死を弔うべく慰霊碑や供養塔を建立し、供養精神を体現してきた。この背景には、人間が大量に生命を搾取するという罪悪感と、そうした犠牲があるからこそ経済活動を行えているという動物に対する感謝の気持ちが見られる。

一方で、動物福祉や動物倫理の議論が盛んな西洋社会では、こうした供養精神は顕在化していない。その理由の1つに、供養精神が機能するための前提となる死生観の違いが挙げられる。西洋社会の基盤にあるキリスト教において、生と死は明確に線引きされており、二元的な死生観を持つが、他方で古来供養精神を体現してきた日本は、輪廻転生をはじめ「生死一如」の観念など、生と死を1つであると捉える連環的な死生観を持っている。すなわち、動物倫理の中核にある殺生という動物の生死に関して、西洋社会を基点に展開されてきた動物倫理の議論自体が二元的な死生観を基盤としているがゆえ、連環的な死生観を持つ日本では議論が展開されにくいのではないだろうか。

このように、供養精神と死生観から動物倫理の議論を捉え直すと、動物倫理自体が今日の大量生産・消費時代における特有の死生観を体現していると指摘できる。すなわち、人間の生産活動を通して動物を資源化し、消費するという大量生産・消費システム、ひいては効率的かつ大量に生産することを可能とする分業によって、動物の生命を生み育む「育生」の過程と、動物を原材料として資源化する「殺生」の過程とが分断され、日常生活の中で消費される原材料としての動物がいかにして育てられてきたのかが不透明になった。それゆえ、消費者側が生産過程に対して不信感を抱き、ことに動物の生命が直接的に関わる畜産に対して抗議の動きが見られるのである。すなわち、「動物倫理」という概念が実社会へと表出していること自体が、大量生産・

消費時代における私たち人間の二元的死生観を意味しているのではないだろうか。以上を踏まえ、今後より包括的に動物倫理を捉えるために、キリスト教や仏教など宗教や思想における動物観や供養精神および死生観についてより精緻に調査していく必要がある。

最後に、本稿では肉食業界を軸とした動物倫理の議論が中心であったが、冒頭で述べたように、こうした議論の延長にファッション業界における「エシカル」の論点がある。欧米を中心に毛皮が禁止されているが、今後は食肉産業の副産物である皮革や、ひいてはシルクなど昆虫由来の素材に対しても言及されるようになるだろう。そうした今後起こり得る議論を考慮すると、工業型畜産を通して大量に生命を殺生する現代において、消費者目線の〈論理〉としての動物倫理と、供養をはじめとした生産者目線の〈実践〉の両者に注目し、実社会に根を張った議論を展開することが重要である。さらには、その根底にある大量生産・消費システムの影響についても論じる必要があるだろう。こうした多角的な議論は、現代における人間と動物との関係の本質的な再考へとつながっていくのではないだろうか。

〈注〉

1) エシカルという定義自体は曖昧であるが、その具体的な解釈の1つとして、1989年にイギリスのマンチェスター大学の大学生が創刊した世界初のエシカル専門誌『エシカルコンシューマー (ethical consumer)』では、独自に「エシスコア (ethiscore)」というエシカルの度合を測る5つの評価基準を設けている。具体的には、環境（環境汚染、有害物質排出への関与など）、動物（化粧品の動物実験、動物の虐待など）、人権（人権侵害、労働者権利、労働環境など）、反社会的勢力への支援の有無（不当な寄付など）、持続可能性（フェアトレード製品など）といった視点から、企業や商品、サービスを評価してい

る [万・池亀 2017: 24-25]。

2) 「ラナ・プラザ」には多数の縫製工場があり、約5,000人の雇用者によって世界的なファッションブランドの衣料品が製造されていた。ラナ・プラザ崩落事故は、1,134人が死亡、2,500人以上が負傷した、史上4番目に大きな産業災害であった [Fashion Revolution Foundation 2022]。

3) Veganuary Movement to Welcome 1 Millionth Participant, *The Guardian*.

(<https://www.theguardian.com/lifeandstyle/2020/oct/26/veganuary-movement-plant-based-food> 2022年9月27日閲覧)。

4) たとえば、日本ケンタッキー・フライド・チキンは、年間で約2,200万羽（約2億ピース）ものチキンを使用しており、1974年から鶏への感謝と供養を目的に「チキン感謝祭」を執り行っている [Jタウンネット編集部 2019]。

〈参考文献〉

- 池上俊一 1997「西洋世界の動物観」国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム 動物と人間の文化誌』吉川弘文館、pp. 99-130。
- 石川創 2010「動物福祉とは何か」『日本野生動物医学会誌』15(1): 1-3。
- 伊勢田哲治 2016「動物福祉と供養の倫理」『関西実験動物研究会会報』pp. 6-22。
- 伊勢田哲治・井上太一 2022「【討議】なぜ私たちは肉を食べることについて真剣に考えなければならないのか」『現代思想』(2022年6月号) 50(7): 8-22。
- 枝廣淳子 2018『アニマルウェルフェアとは何か——倫理的消費と食の安全』岩波書店。
- 黒田昭信 2022「食べられるものたちから世界の見方を学び直す——個体主義的世界観から多元的コスモロジーへ」『現代思想』(2022年6月号) 50(7): 125-136。
- 小松和彦他 1997「【公開討論】人間社会における動物の位置」国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム 動物と人間の文化誌』吉川弘文館、pp. 169-226。
- シンガー、ピーター 2011『動物の解放』(改訂版) 戸田清訳、人文書院。

鄭孝雲 2011「知的融合言説としての『死生学』研究」『死生学研究特集号 日韓国際研究会議「東アジアの死生学へⅢ」』pp. 69-92。

中村生雄 2010『日本人の宗教と動物観——殺生と肉食』吉川弘文館。

長野浩典 2015『生類供養と日本人』弦書房。

古瀬公博 2022「倫理的消費をめぐる消費者間の相互作用——ヴィーガニズムに関する予備的調査の報告」『武蔵大学論集』69(2・3・4): 17-28。

依田賢太郎 2007『どうぶつのお墓をなぜつくるか——ペット埋葬の源流・動物塚』社会評論社。

依田賢太郎 2014「東アジアにおける動物慰霊碑をめぐる文化」東海大学紀要海洋学部『海—自然と文化』12(3): 54-59。

依田賢太郎 2018『いきものをとむらう歴史——供養・慰霊の動物塚を巡る』社会評論社。

万人立・池亀拓夫 2017「世界のエシカルブランドと中国におけるエシカル動向に関する考察」『デザイン学研究』63(5): 23-32。

インターネット資料

NPO 法人動物実験の廃止を求める会 (JAVA)「毛皮がどう作られるか知っていますか?——狭く不衛生なケージで一生を過ごす動物たち」『朝日新聞 sippo』(2021年1月11日)

<https://sippo.asahi.com/article/14080833> 2022年9月27日閲覧。

環境省「実験動物の適正な飼養保管等を推進するために」(2008年3月)

<https://www.env.go.jp/council/14animal/y143-21/ref01.pdf> 2022年9月27日閲覧。

環境省「令和2年版 環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書(概要)」(2020年6月)

https://www.env.go.jp/policy/200630_R02hakusho_gaiyou.pdf 2022年9月27日閲覧。

環境省 2022「Sustainable Fashion——これからのファッションを持続可能に」

https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/ 2022年9月27日閲覧。

ケリング 2022「サステナビリティ 動物福祉」

<https://www.kering.com/jp/sustainability/safeguarding-the-planet/animal-welfare/> 2022年9月27日閲覧。

国際連合広報センター「国連、ファッションの流行を追うことの環境コストを『見える化』する活動を開始」(2019年4月30日)

https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/32952/ 2022年9月27日閲覧。

Jタウンネット編集部「ケンタッキーが神社で行う『チキン供養』——どういう行事なの? 広報に聞いた」(2019年12月28日)

<https://j-town.net/2019/12/28299772.html?p=all> 2022年9月28日閲覧。

消費者庁「『倫理的消費』調査研究会取りまとめ——あなたの消費が世界の未来を変える」(2017年4月)

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_education/consumer_education/ethical_study_group/pdf/region_index13_170419_0002.pdf 2022年9月27日閲覧。

消費者庁 2022a「サステナブルファッション習慣のすすめ」

<https://www.ethical.caa.go.jp/sustainable/> 2022年9月27日閲覧。

消費者庁 2022b「令和4年版消費者白書」(令和3年度消費者政策の実施の状況、消費者事故等に関する情報の集約及び分析の取りまとめ結果の報告)

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/white_paper/assets/2022_whitepaper_all.pdf 2022年9月27日閲覧。

マルティーン・カレーラ「イタリア、6月までに毛皮の生産を禁止——『モンクレール』に続き、『ドルチェ&ガッバーナ』も」『WWDJAPAN』(木村和花訳)(2022年2月7日)

<https://www.wwdjapan.com/articles/1319256> 2022年9月27日閲覧。

米沢市企画調整部秘書広報課 2022「草木塔」

<https://www.city.yonezawa.yamagata.jp/1769.html> 2022年9月28日閲覧。

リア・ドラ「ケリング、傘下の全ブランドで毛皮廃止へ」『CNN.co.jp』(2021年9月26日)

<https://www.cnn.co.jp/style/fashion/35177123.html> 2022年9月27日閲覧。

Fashion Revolution Foundation 2022 About, Fashion Revolution.

<https://www.fashionrevolution.org/about/> 2022年9月27日閲覧。

The Vegan Society 2022 History.

<https://www.vegansociety.com/about-us/history> 2022年9月27日閲覧。

(2022年12月5日受理)

Animal Ethics Discussions in Contemporary Japan: The Kuyō Spirit, a Japanese Relational View of Life and Death

Mari Kozawa

Keywords

Ethical, Animal Welfare, Animal Ethics, Kuyō, View of Life and Death

In recent years, social problems such as environmental destruction and mass disposal of clothes have become apparent in the fashion industry. Based on such issues, the value of ethics in attaining a better society and environment is gaining attention around the world. In particular, there have been discussions on animal welfare and ethics to improve the treatment of animals and to consider humans' relationship with animals philosophically. In fact, the production of fur is prohibited in Europe due to the public's resistance to animal materials that result from the killing of animals, and vegans avoid such materials.

In Western society, which has led the emerging discussions on animal welfare and ethics, views on animals are based on Christian anthropocentrism and include their placement in a hierarchical order from a human perspective. However, ethical debates concerning animals have been seeking to move away from anthropocentrism, although they still remain human-centered.

In these discussions, the "Kuyō," which refers to the spirit of mourning that people have with regard to the killing of animals, should be noted. In fact, companies and organizations that kill animals for resources have a sense of guilt that humans exploit for a large amount of their lives, as well as a sense of gratitude to animals for enabling economic activities through their sacrifice. Therefore, people have embodied the spirit of Kuyō by building memorial monuments and towers to mourn the death of animals.

This paper focuses on the Kuyō and views on life and death, pointing out that discussions on animal ethics have been developed in an anthropocentric and consumer-centered way. It also considers the future development of such discussions based on a comparison of the views on animals, life, and death between Christianity, which is the foundation of Western society, and Buddhism in Japan.